

主 題	終末期にある高齢者が満足する食事の援助		
副 題	身寄りのない高齢者が最後までその人らしくあるために		
キーワード1	看取り介護	キーワード2	多職種連携

研究期間	8か月	事業所	特別養護老人ホーム 光風園	
発 表 者	主任看護職員・田中 喜久美		共 同 研究者	主任看護職員・酒井 恭子
T E L	0553-33-7511	E-Mail	Koufu-kai@tuba.ocn.ne.jp	
F A X	0553-33-7513	U R L	www.koufuukai-yamanashi.or.jp	
事 業 所 紹 介	光風会は「利用者の立場で」を基本理念に、山梨県甲州市の街並みを一望できる丘陵の果樹園地帯に拠点を持つ。特養では、終末期ケアに力を入れ、ご本人ご家族が望む看取り介護を実践している。			

<p>《1. 研究前の状況と課題》</p> <p>当園では、看取り介護を実践している。平成28年度の死亡退所者13名のうち看取り同意をいただいた方は12名で、急変による死亡以外の方はほぼ看取り介護を行っている。更に28年度より、ショートステイご利用者の看取り介護も実施している。</p> <p>終末期はご本人の意思確認ができなくなっている場合が多く、具体的な看取り介護の内容は、ご家族の意向を中心に決定している実情がある。しかし、独居老人や身寄りのない高齢者が増えている現代において、終末期の具体的なケア方針を誰が決定していくのが課題になっている。当園でも、終末期ケアの方針を職員が判断しなければならないケースがあり、個別性のある援助ができず課題となっていた。</p>	<p>《2. 研究の目標と期待する成果・目的》</p> <p>①研究目的</p> <p>身寄りのない終末期にある利用者に対し、最後までその人らしい満足する食事援助を行った内容を検討し、介護の役割と課題を明らかにする。</p> <p>②期待する成果</p> <p>これまでの身寄りのない事例では、職員が「何かしてあげたい」と思いつつも、具体的にどのように行動して良いか分からず、個別性のある援助ができないままであった。今回の事例では、時期を逸せず援助を実施するため、多職種間でケア方針を検討した。職員が具体的なケアの方針を決定することの重要性や責任を認識すること、亡くなる直前までその人らしく満足する生活を送れるよう援助することをねらいとし実施した。その結果を今後のケアに継続できるよう考察する。</p>
--	---

<p>《3. 具体的な取り組みの内容》</p> <p>① ケース紹介 N 氏 92 歳 女性 内縁の夫は他界し身寄りなし。胆嚢炎を発症。脂質摂取で嘔吐や発熱し入院を繰り返す。食事はエンジョイゼリーを 1.5 パック (450Kcal) / 日のみ。</p> <p>② 徐々に衰弱する N 氏に対する職員の思い</p> <p>今が食べたい物を食べることができる最後のチャンスかもしれない。N 氏はおいしい食事を食べたいと思っているだろう。N 氏の笑顔を取り戻したい。本人に喜んでもらえる援助がしたい。</p> <p>③ 職員の葛藤</p> <p>N 氏の生命に関わる重要なことを職員が決定して良いのか。職員の自己満足ではないか。</p> <p>④ 介護職員、介護支援専門員、看護師、管理栄養士、主治医等での食事内容の検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ・回復の見込みはないが、胆嚢炎は落ち着いている。 ・1 食摂取は困難。昼食時小鉢一品提供。 ・胆嚢炎発症時の観察点、対処方法の確認 <p>⑤ 援助の実際 H28.5.10～10.16</p> <p>マグロの刺身をお見せすると笑顔が見られる。美味しそうに完食。昼食時小鉢一品提供する。毎日ほぼ完食。笑顔や発語が増え、生きる活気が出てきたと感じられる。離床時間が長くなる。背部の褥瘡が完治。発熱嘔吐なし。6 か月経過。10 月 15 日夕食までエンジョイゼリーを美味しいと摂取。10 月 16 日 6 : 00 老衰のため永眠。</p> <p>《4. 取り組みの結果と考察》</p> <p>① 職員の葛藤について</p> <p>N 氏入所時より家族のように思い援助してきたことが、終末期を迎えた N 氏に対する思いにつながった。</p>	<p>しかし、一口でも食べてほしいという思いの一方で、食べることへの不安や困難を感じ、生命に直結するかもしれない援助方針を決定することの重圧を経験した。今回の事例では、担当介護職員の N 氏に対する思いの強さと、医師や看護師の専門的知識による判断や、管理栄養士による個別食の提供が、介護職員の不安軽減につながったと思われる。そして、職員全体の「N 氏の QOL に関わろう」という意識改革につながった。</p> <p>② N 氏の状況について</p> <p>小鉢一品提供したが、胆嚢炎再発はなかった。再発しなかった理由は不明である。精神状況は好転し、褥瘡完治など身体面の改善もみられた。対象の生命力を信じ、一緒に生活を楽しみ、生きる喜びを感じることの重要性を職員は体験した。</p> <p>《5. まとめ、結論》</p> <p>看取り介護の方針決定時のポイント</p> <p>① 利用者の望みを叶えたいという強い思い</p> <p>② 利用者の生命力を信じ共に喜びあえる援助</p> <p>《6. 倫理的配慮に関する事項》</p> <p>成年後見人、介護支援専門員を通し、N 氏の遺骨の管理をする遠縁の方に、本研究発表にあたり写真の使用、発表内容について口頭で説明し、同意を得た。</p> <p>《7. 参考文献》</p> <p>1) 田中奈保美著：枯れるように死にたい，新潮社，2010</p> <p>2) 石飛幸三著：「平穏死」のすすめ，講談社文庫，2013</p>
--	---